

No-Dig Down Under 体験記

富田 昌晴
TOMITA Masaharu

ヤスタエンジニアリング(株)
設計部課長



論文発表に向けて

一昨年の末に「シドニーでの論文発表に応募しませんか?」というJSTTの方から話を頂きました。その時は応募の締切りには間に合わないとおきらめていましたが、翌年に入り締切りが2月になったと情報をいただき、アブストラクトを作り応募しました。審査結果が分かったのは3月末で、それから大慌てでした。

私は今回初めてのものを二つ体験しました。一つは英語での論文発表、もう一つは海外での透析でした。私は3年前に腎不全になり透析を週3回行う生活を送っています。そのため当初約8日間滞在する予定だったので当然シドニーで透析を受けなければなりません。この二つの準備を行わなければなりませんので、時間が足りなくて練習もままならない状態でした。

No-Dig DownUnderの開催が9/1～9/4だったので、まだ5ヶ月間あると思いきや、それから沢山の論文提出に追われる日々でした。初めてなので手順がよくわからないまま進んでいったのですが、必要書類は、論文提出→本論文提出→パワーポイントファイル提出と言った流れでした。私は英語が出来ないで、日本語で書いてそれを翻訳会社に訳してもらう作業を繰り返しました。

論文提出、本論文提出と順調に進みましたが、パワーポイントファイルで手間がかかりました。このパワーポイントファイルが実際に発表する文面を含んでいたので、この内容で持時間内(25分)に収められるか調整がなかなか出来ませんでした。なんせまったく英語だめなのでまともに読むことすらできません。録音してもらい、それを聞きながら練習する日々を送りました。しかし、途中でやはり速度に対応できず途中を省略していただき、何とか



Sydney Convention and Exhibition Centre



透析病院（Mater Hospital）付近

時間内に収まるようになったのは出国2週間前でした。それでもただ読むだけです。発音はメチャクチャな状態です。

それからの日々は読み上げる文面を録音した音声ファイルを区切りごとに編集し、通勤途中や仕事の合間に聞いて発音の練習をしました。もちろん病院でも透析中繰り返し聞いていました。でもやはり聴いているだけではだめで、発声練習を帰宅後家でやっていました。しかし和声英語にしかありません。大きなプレッシャーをかかえながらシドニーへ向かうことになりました。

病院の方は、約2か月前に事前予約が必要でした。代行予約をお願いし、日程を発表日に合わせ、透析日を決めました。その時点で出発する日時、飛行機の便名、パスポート等が必要だったので旅行会社への予約が同時に必要となりました。すべて自分でやらなければならなかったもので、いろんな人との打ち合わせが続きました。疲れましたね。

海外透析を行う病院からは必要な検査書類の提出、現在のサマリーデータ等の提出依頼があり、通っている病院でお願いしました。この検査データが返ってくるのが遅くて、提出期限過ぎての提出となりました。いろんなことが期限にギリギリ状態でしたね。

● シドニーにて

さて、出発した翌日の朝シドニーに到着しました。出発した日本はまだ残暑が残り暑かったのですが、こちらは南半球で反対の気候です。寒いと思い、そ

れなりの服装を準備していったのですが、ちょうど良い気候で天気にも恵まれました。

その日は透析日だったので、そのまま病院へ直行です。しかし時差を誤って計算してしまい、透析時間に1時間ほど遅れてしまいました。その日は土曜日ということもあり午前中しか透析できないとのことでしたが、心良く迎えていただき透析を無事終えることが出来ました。通訳をお願いしていましたので、事情をうまく伝えていただけたものと思います。

その後ホテルに入りホテル近場を散策しました。今回宿泊したホテルはマーティンプレイス通りのウェスティンシドニーです。昔の郵便局跡をそのまま生かしたホテルで、古きイングリッシュの様相でした。

シドニーの町は近代的なビル群と、古い建築物がいい感じで建ち並んでいます。

その日の夕食は日本から同じ論文の発表をする方やJSTTの皆さんとご一緒しました。ダーリング



ウェスティンホテル



ダーリングハーバー



近代建築とイングリッシュ様式建築物

ハーバーで湾を眺めながらの食事は格別でした。今回の旅で一番美味しい食事でしたねえ。

次の日からは国際会議等が開催され、論文発表が始まります。私の出番は最終日の9/4だったこともあり、なかなか落ち着いて観光とはいきませんが、行っちゃいました。

自分の時はこうしようとか、いろんな考えをしないように、あえて他の人の発表は見ないことにしていました。そんな器用ではありませんけどね。

2回目の透析を済ませ、やっと町に慣れてきました。最初はタクシーに乗って行っていた目的地も、このころになると歩いて行けるようになっていました。朝はひんやりして気持ちよく、昼間は少し汗ばむ程度の陽気で快適です。

私は以前シドニーへ来たことがあります。20年ほど前なのでほとんど覚えていなかったのですが、オペラハウスだけは変わりなく健在でしたね。でも修復工事中であまり見学することはできませんでし

たが、また来たんだな〜と感動していました。もう仕事の事はまったく頭にありませんでしたね。と言いつつも、文面と音声を入れたiPadを常に持ち歩いていた。そのオペラハウスの隣に位置する王立植物園へ行き、木陰の芝生に寝そべて練習しました。心地よかったですね。すがすがしい気候と青い空と緑の芝生、程よい風に小鳥の声。虫さえないければ超快適だったのですが。今思えば一番の思い出です。

シドニーの色々な環境に癒され、あまり緊張もせず本番に臨みました。

● パーティー

9/2ディナークルーズ、9/3ガラディナーと連夜パーティーが開かれました。ディナークルーズはダーリング港があるコックル湾から出航し、オペラハウス脇を通りジャクソン湾にて折り返し再びダー



オペラハウス



王立植物園 (ロイヤル・ボタニック・ガーデンズ)



ガラディナーの食事



ガラディナー Award受賞式

リング港へ戻る航路で約3時間のクルーズでした。船内ではシドニーの夜景を見ながらの食事。デッキに出て、きれいなネオンに照らされたハーバーブリッジやオペラハウスを見ることが出来ました。ラストは皆さん船内で踊っていました。

ガラディナーでは今年の本No-DigAwardの授賞式が行われ、今年も日本のアルファシビルエンジニアリングさんが受賞されました。その光景を見てうらやましかったですね。

一昨年、弊社が開発したミリングモール工法がNo-DigAward 2012を受賞しましたが、開催地がブラジル・サンパウロということで、片道約2日を要することもあり、透析の事やビザの取得に間に合わなかったりで、残念ながら授賞式への出席は叶いませんでした。そのため授賞式は九州大学の島田先生にお願いすることになりました。その後、島田先生とはお会いすることもできないままだったので、今回シドニーでようやくご挨拶することが出来

お礼を言うことが出来ました。

● 論文発表

前述に緊張しなかったと書いてしまいましたが嘘つきました。

発表会場はシドニー・コンベンションアンドエキビジョンセンターです。その中のエキビジョン第5ホールで、1階では展示会が開催されています。その2階に発表会場があり3つの部屋に分かれて、それぞれで同時に論文発表が行われています。

会場に入り、あ〜だんだんと緊張してきました。NTTの田邊さんが私の30分前だったので少しだけ覗きました。私とは違い上手に話されていました。その光景を見てより緊張が高まりました。自分の番になり、英語がわからないことを、最初にJSTTの近藤さんから説明していただき、それからのスタートとなりました。



ロックス地区

説明していただいた事で、私は緊張がとれ自分なりにいいんだと開き直っていました。実は私、目も悪く網膜症という病気です。明るくても暗くても見えにくい状態です。iPadに文面を入れておき、拡大したものを壇上で見ながらの発表となりました。とてもじゃないですが見ずに発表なんて私には無理でしたから、お客さんには大変失礼だとは思いましたが、最初から最後まで下を向きっぱなし状態でした。

もう夢中で読むだけです。ページ送ることも忘れてしまいました。今でも思うのですが、途中の記憶がないんです。本当に話したのか疑問に思うところですが、「ちゃんと聞き取れ、わかりましたよ」とJSTTの近藤さんから聞き、一安心しました。発表後、質問がありましたが、これも近藤さんに助けていただき、何とか乗り切ることが出来ました。

会話ができませんと駄目ですね。忙しい近藤さんに頼ってばかりで、申し訳なかったと思います。論文発表後、シドニーで最後の透析に向かいました。

その日の夕食は、堀地先生のお誘いでロックスにあるお店で食事会となりました。帰国日にはシドニー市内を観光バスで巡り満喫することが出来ました。

シドニーのあちこちのお店で見かけたストーブです。初めて見た形だったんですが、上の方が熱くなります。上についた傘で熱を反射させ下方に暖房するものらしいです。店内ではなくオープンカフェスタイルで食事されている光景をよく見かけたので、そのための工夫なのでしょうかな？

● 成果

今回、私の目的はミリングモール工法の事を知っていただき、その機能や性能を知っていただく事はもちろんですが、私のような病気持ちの体で、普段とは違った環境、言語での発表が出来るのか？を自分自身確認するためでもありましたし、若い後輩達に示すためでもありました。これを失敗すれば会社の損失になってしまう事は当然

ですから、かなり気負っていましたね。なんせ世界ですから。

病弱で奥手の私が、まさかこんな場所で論文発表する事になるなんて思ってもいませんでしたから、今回の論文発表に伴い少しは成長したもの？と思っています。

私にとって、スキルアップに成り得たと思いますし、ぜひ、若い後輩達にも挑戦してもらい、自分磨きをして欲しいと思います。

充実した時間をありがとうございました。



上の方があったかくなるストーブ

